

河野 航・ピアノ

Wataru KONO・Piano

5歳よりピアノを始めた（らしい）。飽きっぽい性格が災いし、引越しや進学のためにピアノの勉強が中断され、おまけに中学校では吹奏楽部でチューバ、大学ではオーケストラに入ってヴィオラに浮気をする始末。ただし、チューバやヴィオラを勉強したおかげで、ピアノを弾くのにあたっても左手や中声を聴けるようになったという点もあるので、悪かったことばかりではないと都合よく解釈している。新交響楽団にヴィオラで入団した直後の演奏会で、伊福部先生の『シンフォニア・タブカーラ』に出会い、氏の作品に魅せられる。所属しているオーケストラ・ニッポニカでソリストとして出会った現在の師匠の下で、レッスンを続けている。ピアノを鈴木和代、坪井圭子、近藤信子、柴沼尚子、大島正泰、福本俊之、三輪郁の各氏に師事。

●

加藤 のぞみ・ヴァイオリン

Nozomi KATO・Violin

3歳より『言葉を覚えるように』ヴァイオリンを『身につける』。初めての邦人作品との出会いは、10歳のときの宮城道雄『春の海』。尺八の様な音を出すのだから、音の最初からヴィブラートをかけない、と教えられ、ノンヴィブラートの美しさを知る。新交響楽団に入団して『伊福部個展』で、ブラームスやマーラーとは全く違う交響楽の世界が在る事に衝撃を受ける。オーケストラ・ニッポニカで活動する中で、日本人作曲家にも多くの魅力的な室内楽曲があることを知り、紹介したいとこの企画に取り組む。ヴァイオリンを故広瀬八朗、藤家桜子の各氏に、バロック・ヴァイオリンを竹嶋祐子氏に、室内楽を原田幸一郎氏に師事。

●

今回の演奏に際しては、團伊玖磨氏に作品を委嘱された小林武史先生、三輪郁先生、高木和弘先生に、沢山のアドヴァイスを頂きました。

探楽愉快 Vol.3

3人の会

2011年2月11日(金・祝)

15:00開演 14:30開場

スタインウェイ・サロン東京

松尾ホール

芥川也寸志
團伊玖磨
黛敏郎

ご挨拶

●

本日はお忙しい中を、私共の演奏会にお越し下さり、ありがとうございました。

普段はオーケストラ・ニッポニカという団体で、主に日本人作曲家の作品の蘇演や発掘初演を柱の一つとした活動に力を注いでいる私共ですが、今回はオーケストラで一昨年多くの作品を紹介した芥川也寸志と、彼と共に「3人の会」という活動を展開した團伊玖磨、黛敏郎の室内楽作品をご紹介します。

「3人の会」は1954年に、当時20代半ばで東京音楽学校（現東京藝術大学）の同窓生だった團伊玖磨と芥川也寸志と黛敏郎によって結成され、3人でオーケストラを雇って新作発表をするという大胆な活動を展開しました。演奏会ではそれぞれ代表作となったような作品を初演し、プログラムも趣向が凝らされていました。若者の間では、版型が大きいこの演奏会のプログラムを持って歩くのが、前衛的で格好良い、という現象まで起きたそう。

團、芥川、黛という、作曲では全く違う方向をむいているような3人が、世の中に作品を問いかける、という作業を共同でやったということは、驚きです。活動は第5回目までで途絶え、その後はそれぞれが、それぞれのやり方で社会と関わりながら音楽活動が続けていくのですが、後年、彼らの学び舎である「旧東京音楽学校奏楽堂」の保存運動で再び共闘し、奏楽堂は上野公園内への移設保存が実現しました。

どの作曲家も交響作品やオペラなど大掛かりな作品は有名ですが、演奏される機会の少ない掌の小品にもそれぞれに個性が光っています。

音の楽しみを探すことは愉快なり——これは作品との出会いで私共が心から感じることです。宝物を探して音楽の森を歩く楽しさを、少しでも皆様と共に味わうことが出来れば、これ以上の喜びはありません。

芥川 也寸志 ● ヴァイオリンとピアノのためのSASARA (1978)

Yasushi AKUTAGAWA ・ SASARA for Violin and Piano

芥川 也寸志 ● 秋田地方の子守歌 (1977)

Yasushi AKUTAGAWA ・ Lullaby-based on Folk Song on Akita Province

團 伊玖磨 ● ピアノ曲集『3つの掌編』 (1983)

Ikuma DAN ・ 3 Novelettes for piano solo

I : Allegro moderato - Sostenuto - Tempo I

II : Andante sostenuto e misterioso

III : Pesante - Allegro leggiero

團 伊玖磨 ● ヴァイオリンとピアノのためのファンタジア第3番 (1985)

Ikuma DAN ・ Fantasia No.3 for Violin Solo and Piano

— 休憩 —

Intermission

芥川 也寸志 ● ラ・ダンス (1943)

Yasushi AKUTAGAWA ・ La Danse - Suite pour piano

deux dances avec un intermezzo

I : Allegro delirante

Intermezzo : Prestissimo

II : Rustico

黛 敏郎 ● ヴァイオリンとピアノのためのソナタ (1946)

Toshiro MAYUZUMI ・ Sonata per violino e piano

I : Adagio con abbandono

II : Allegro molto, e con passione

●

ピアノ・河野 航 Piano ・ Wataru KONO

ヴァイオリン・加藤 のぞみ Violin ・ Nozomi KATO

「3人の会」余話

～ 芥川也寸志・團伊玖磨・黛敏郎 ～

林 淑 姫

今年の冬も寒いが、57年前、1954年（昭和29）1月の東京の寒さも相当なものだったらしい。年明けから冷たく曇って北風の吹きすさぶ日が続いていたが、23日土曜日の夕方、遂に雪が降り始めた。夜間には激しい吹雪となり、翌日も降りつづいて、午後6時頃になってようやく止んだ。都心の積雪32cm、東京の1月の降雪量としては明治20年（1887）以来の記録と気象台は発表した（現在に至るまでこの記録は破られていない）。交通機関は軒並み乱れ、ライフラインも支障を来した。都電の軌道にラッセル車を出勤させて除雪作業にあたるなど、東京都は25日早朝から豪雪処理に追われ、その経費2000万、人手3万人を要したという。

芥川也寸志、團伊玖磨、黛敏郎が結成した「3人の会」の最初の発表演奏会は、この記録的な豪雪の2日後、1954年1月26日（火）午後6時30分、日比谷公会堂で幕をあげた。この日も朝から曇天、夕方には小雪がちらつき、翌朝には零下6度にもなろうという寒気のなかであった。「当日は日比谷公会堂も埋まるほど」の大雪だった、という芥川也寸志の回想はいくつかの記憶のスライドがひとつに重なっているようなところがあるが、難儀をきわめたであろうことは想像に難くない。その後の「3人の会」が冬を避けて開催されているのは、この時の雪に懲りたためかもしれない。

戦後徐々に誕生した作曲家グループのなかで、毎回オーケストラを借り切って発表会を開いたのは「3人の会」のみである。ほとんどは室内楽か歌曲に限られていた。最大の理由はもちろん資金不足。オーケストラ作家をめざしていた芥川也寸志（1925-1989）、團伊玖磨（1924-2001）、黛敏郎（1929-1997）にとって規模の小さな作品の発表会は物足りなかったであろう。資金はその大部分を映画音楽の収入から得た。戦後映画の全盛期、売れっ子作曲家だった彼らにして初めて実現した試みだった。

「3人の会」は発足にあたって会の「趣旨」を標榜することはなかった。名称からいっても、3人が映画の仕事で赴いた京都で偶然に会い、誰からともなく言い出したことがきっかけになったという発足の経緯からしても、グループとしての主義主張というほどのものはなかったのかもしれない、あるいは思うことはあっても声高に謳うのは彼らの美学に反したのかもしれない。それらしき文章は残っていないが、第1回演奏会の際に「音楽新聞」のインタビューを受けており、その記事を見ると「どこにも属さず、何物にも縛られず、自由に自分の才能を伸ばして行き、単なる研究発表でなしに作曲を通して世の中に積極的に呼びかけたい、結びつきたい、それには一人よりも三人集った方がより

強力であり、映画音楽、オペラ、バレエなども相談し合ってやり、批判し合い、刺戟し合う方が合理的だ。」

談話だから幾分の曖昧さは否定できないが、当時の、そして以降の3人の創作と人生の輪郭がはっきり語られていると思う。「作曲を通して世の中と結びつきたい」という意思是、日本の作曲家としての「音楽語法を確立する」という決意とともに、共著『現代音楽に関する3人の意見』（1956刊）の通奏低音ともいうべき主張だ。管弦楽作品はもちろん、オペラ、映画、バレエへとつながる幅広い領域への関心が、戦後の音楽を生き生きと動かしていったことは間違いない。3人とも日本の音楽史上画期的なオペラ作品をもち、積極的に映画音楽やラジオドラマのための音楽に参加し、バレエ音楽を創り、そして、それぞれに音楽を人々と広く共有するための仕事にも人生を賭けた。会の結成時、芥川也寸志29歳、團伊玖磨30歳、黛敏郎24歳。個性も作風も信条も異なり、東京音楽学校（東京芸術大学音楽学部）での先輩後輩の間柄という以外に一見共通項の見えない3人だが、方法や表現は違っても志すものは共通していたし、よきライバルでもあった。

ライバルとしての3人。例えばオーケストラ曲。團伊玖磨「交響曲イ調」と芥川也寸志「交響管弦楽のための音楽」は1950年、NHK25周年記念管弦楽賞で特賞を分け合う。例えば電子音楽。芥川がテープ音楽「マイクロフォンのためのファンタジー」（1952）を発表した翌年には黛が日本初のミュージック・コンクレート「X・Y・Z」を作る。そして映画音楽。1953年度の毎日映画音楽賞は「煙突の見える場所」の芥川也寸志に与えられたが、ノミネート作品には、早坂文雄「雨月物語」、伊福部昭「縮図」と並んで、團伊玖磨「にぎりえ」「雁」、黛敏郎「愛人」が挙げられていた。ついでに言えば、発表は第1回演奏会の翌月2月のことであり、芥川也寸志の兄比呂志も同じ作品で助演男優賞を受賞している。

「3人の会」の5回（新作発表は4回まで）の演奏会は3人それぞれの創作人生にとっても日本の音楽史にとっても重要な演奏会となった。発表された作品はいずれも大作揃い。なかでも芥川「エローラ交響曲」「ヒロシマのオルフェ」、團「シルクロード」、黛「涅槃交響曲」はエポック・メイキングな傑作だ。それを彼らは自分たちの手で発表したのだった。

「3人の会」演奏会記録

第1回 1954.1.26（火）日比谷公会堂

タンスマン「トリプティーク」（日本初演）

團伊玖磨「ブルレスケ風交響曲」

黛敏郎「饗宴」

芥川也寸志「交響曲」（「交響曲第1番」）

第2回 1955.6.23 (木) 日比谷公会堂

ウェーベルン「交響曲」(日本初演)

黛敏郎「トーンブレロマス55」

芥川也寸志「嬉遊曲」

團伊玖磨「シルクロード」

第3回 1958.4.2 (水) 新宿コマ劇場

芥川也寸志「エローラ交響曲」

團伊玖磨「交響組曲 <アラビヤ紀行>」

黛敏郎「涅槃交響曲」*尾高賞受賞

第4回 1960.3.27 (日) 読売ホール

團伊玖磨「2楽章の交響曲」(「交響曲第3番」)

黛敏郎「曼荼羅」(「曼荼羅交響曲」)

芥川也寸志「オペラ <暗い鏡>」(「ヒロシマのオルフェ」)

第5回「3人の会による現代日本作品の夕」1962.4.16 (月)**大阪フェスティバルホール *第5回大阪フェスティバル**

團伊玖磨「シルクロード」

黛敏郎「涅槃交響曲」

芥川也寸志「オペラ <暗い鏡>」(「ヒロシマのオルフェ」)

第1回、第2回の演奏は東京交響楽団、タンスマンとウェーベルン作品は上田仁指揮。

第3回、第4回はNHK交響楽団、第5回は大阪フィルハーモニー交響楽団。

第3回までと第5回は作曲者が自作を指揮、第4回は岩城宏之指揮。

昭和の時代が終ると、戦後世代の旗手として華やかに、そして堅実に活動した3人の作曲家は足早に去っていった。彼らが去ったあとを埋めるものはいない。

芥川也寸志のピアノ曲「ラ・ダンス」(1948)は東京音楽学校研究科修了作品として作曲された。芥川也寸志は在学中に伊福部昭に師事し、彼のオスティナート手法の影響を強く受ける。「ラ・ダンス」もまさにそれで、リズムが刻むスピーディな進行とリリックな旋律は彼の音楽の終生変らぬ特質でもある。インテルメッツォをとまなう2つの舞曲からなる。学内での発表に先立って、1948年2月5日、田村宏によりNHK「現代日本の音楽」で放送初演。その後もしばしば演奏されている。楽譜は音楽之友社刊。

ヴァイオリン曲2曲はいずれもNHK・TV「音楽の広場」で発表されたものである。「音楽の広場」は芥川也寸志と黒柳徹子の司会により1977年4月から84年3月まで続いたク

ラシック音楽の入門番組で、ファンも多く、全245回の長寿を誇った。オーケストラは尾高忠明率いる東京フィルハーモニー交響楽団がレギュラー出演していた。芥川也寸志はこの番組のためにいくつか新作を書いており、「秋田地方の子守歌」は1978年1月7日、徳永二男のヴァイオリン独奏、東フィル、尾高指揮により初演。ピアノスコアが残されており、本日の演奏はその自筆譜による。「ヴァイオリンのためのS A S A R A」は1979年2月3日、前橋汀子、由子姉妹によって演奏された。楽譜未出版。自筆譜が日本近代音楽館「芥川也寸志文庫」に残されている。*

團伊玖磨はヴァイオリニスト小林武史のために4つの作品を書いている。1973年から85年にかけて作られた「ヴァイオリンとピアノのためのファンタジア」3曲と90年「ヴァイオリンとピアノのためのソナタ」がそれである。公私にわたる小林との親しい交際が、それまで手がけることのなかったヴァイオリン曲へと導いたようだ。本日演奏される「ファンタジア第3番」は85年10月31日に初演された。「ソナタ形式を基調とした自由な大型の幻想曲」(作曲者)である。この作品にも次のピアノ曲にもいえるのだが、團伊玖磨の器楽は視覚を刺戟する。オペラの一シーンを見ているような錯覚に陥ることがある。楽器はオペラのアリアが人物の心理を歌うように、自然な息づかいで歌い、語ってドラマを繰り広げていく。オペラや歌曲に通じていた團独自の世界ではなかるうか。

ピアノ曲集「3つの掌編 3 Novelettes」は、「ファンタジア第3番」の2年前、中村紘子のために作曲され、1983年4月11日「中村紘子リサイタル」で初演された。「ノヴェレッテ」のタイトル通り、物語り風の3つの小品からなる。華やかなパッセージにつづいて現れる音楽は、ピアノに堪能だった作曲者の指をも映して自由に、ときに軽やかに、ときに重く、そしてどこか懐かしい世界を創り出す。楽譜はいずれも音楽之友社刊。

黛敏郎はヴァイオリン独奏曲を2曲残した。「ヴァイオリンとピアノのためのソナタ」(1946)と「ポエム」(1950)だが、本日演奏される「ソナタ」は、東京音楽学校本科在学中に作曲された(「ポエム」は研究科在学中)。当時ドビュッシーに傾倒していたが、このソナタを書くためにセザール・フランクを徹底的に研究した、という作曲者の言葉が残されている。フランクの循環主題の技法に倣って、第1楽章冒頭、ピアノによって示される半音下降のモチーフがさまざまに変転しつつ再現される。古典的形式の中に若き黛の閃きが舞う。1946年11月12日、江藤俊哉のヴァイオリンと園田高広のピアノによって初演。楽譜は『世界大音楽全集』(音楽之友社)所収。

*現在明治学院大学図書館内にあり、開設準備中である。5月公開予定。